

50. わが国女装における帯の一研究（第2報）

奈良時代、絵画に表現された帯

実践女子学園短大 藤永 しも

1. 日本の衣服、和服は世界中の衣服に類のない独得なもので特異な構成をもっている。その組立ては平面的で人体の立体感や曲線など全く無視したと見られる極めて解放的な衣服であるがこれをその着装法によって、人体に密着させたり遊離させたりしながら美を発揮させているのである。特に女性の着装姿態は、りっぱな芸術美を表現しているが、この着装に最大の役割を果たしているものに帯がある、この帯はその機能性と共に総合的な美を現出するためわが国の衣服着装上最も重要な位置を占めている。しかしこの帯についての研究は古来より考古学、風俗記、服装史などに附随的に扱われているのみであるからこれを更に探究することの必要を認め、本研究を始めた。

2. さきに実践女子大学紀要（自然科学，家政科）第4集に上古時代五六世紀の埴輪の帯について発表したもので今回は，奈良時代の絵画，薬師寺吉祥天女像，正倉院の樹下美人屏風絵（鳥毛立女屏風）浄瑠璃寺吉祥天像などの帯を考察し，また当代とくに影響のあった唐代の敦煌の壁画に描かれている婦人の帯など対比しながら探究を進めてみた。